教壇実習報告　グループ１（日本語教育）

人間文化創成科学研究科　比較社会文化学専攻
呉暁婧　黄明淑　小松奈々　福冨理恵

教壇実習報告

1. 授業の背景

コミュニケーションを円滑に進めるためには、話し手だけでなく聞き手の言語行動も重要である。特に日本語の会話にはあいづちを始めとする聞き手の言語行動が多く見られ、日本語学習者が日本語母語話者との会話において、これらを適切に使用できなかった場合、コミュニケーションに支障をきたしたり、相手に良くない印象を与えたりしかねない。今回の教壇実習では、JFL 環境では意識が向けられにくい聞き手側の発話、特にあいづちを取り上げ、その機能と使い方について理解させることを目的とした。また、JFL 環境にある学習者にとっては、あいづちという学習項目自体への認識が薄いことが予想され、教師主導による従来の教授型授業では学習効果が得られにくいと考えた。そこで、教師が教えたことを学ぶのではなく学習者の「気づき」を促す指導が必要であると考え、学習者自身が聞き手の言語行動の存在に気づき、意識化しながら学習できるような授業デザインを取り入れた。

2. 先行研究

宮崎（2003）では、日本への短期留学プログラムにおける指導実践が報告されている。ここでは、学習者自身が聞き手の行動に気づくように教師が働きかけを行い、理解につなげる試みがなされている。今回の実践では、宮崎（2003）のクラス活動を参考にし、授業の流れを組み立てた。

中井ほか（2004）では、談話および会話分析的アプローチの観点から、会話教育における指導項目を提案している。指導項目は話し手の技能や聞き手の技能などに分類されており、今回の実践では、聞き手の技能のうち「あいづち的な発話」を取り上げた。

3. 授業目標

授業目標には以下の３つを設定した。

1) 映像を通してあいづちの存在に気づき、あいづちの有無によって会話にどのような違いがあるのかを考える。
2) グループワークの中であいづちの機能について考える。
3) スクリプトを使った練習や教師を相手とした口頭練習を通して、あいづちを使うタイミングを体得する。

グループワークで出た意見をクラスで共有し、教師からの説明はそこに補足する形をとることで、教師の説明を一方的に聞くという受身的な授業ではなく、学習者自らが考えて学ぶという授業を作ることができると考えた。なお、一度の授業実践であいづちの使い方を完全に習得することは難しいため、今回の授業ではあいづちの存在に気づき、その機能について理解することを一番の目標とした。

4. 授業概要および学習項目

授業は 2009 年 2 月 16 日に韓国の同徳女子大学校において行った。授業時間は 75 分間で、学習者数は 18 名、日本語のレベルは初級後半から中級前半であった。

学習項目は、友人同士の会話におけるあいづちの種類、あいづちの機能、あいづちのタイミングの３点であった。

1) あいづちの種類

今回の授業では友人同士の会話におけるあいづちを扱った。目上の人との会話や改まった場での会話と、友人同士の会話では使用されるあいづちは異なるが、あいづちがより多く使用され、あいづちの有無による印象の違いが現れやすい友人同士の会話を取り上げた。

2) あいづちの機能

堀口（1997）の分類によると、あいづちの機能には「聞いているという信号」「理解しているという信号」「同意の信号」「否定の信号」「感情の表出」の 5 つがある。今回の授業では、このうちの「聞いているという信号」「理解しているという信号」「感情の表出」の３つの機能を取り上げた。

3) あいづちのタイミング

文末の他に、「けど、て、で、から」などの節の切れ目にもあいづちを使うと効果的であることを示した。

5. 授業内容

授業は、ビデオ視聴、グループワークに続き、教師からの説明を行い、最後に練習・発表という流れで行った。まずビデオ視聴では、聞き手のあいづちが多いビデオⅠと、あいづちの少ないビデオⅡを用意し、ⅠとⅡの組み合わせで 2 回ずつ見せた。1 回目は 2 つのビデオを見比べ、あいづちの有無による印象の違いに注目した。2 回目はどのようなあいづちが使われているかを意識するために、聞き手の発話をメモした。

グループワークでは、ビデオ視聴で気づいたことをグループで共有した。各グループにワークシートを配り、3つの質問について話し合った。質問1ではビデオⅠ・Ⅱそれぞれの印象、質問2ではビデオⅠで聞き手の使っていたあいづち、質問3では会話の中であいづちが果たしている効果について尋ねた。このように、ビデオ視聴で得られた気づきをグループ内で共有し、話し合うことによって、気づきがさらに深まることを狙った。回収したワークシートには、あいづちの効果として「話をしている人が円滑に話せる」「話したい雰囲気を作ってくれる」などが挙げられていた。あいづちの存在に気づき、その機能について理解するという授業目標は達成できたと言える。

話し合いの結果を発表した後、教師がそれらをまとめながらあいづちについての明示的な説明を行った。まず「あいづち」という言葉を提示し、それらの機能には「聞いている」というサイン、「わかった」というサイン、「気持ち」の表現などがあることを説明した。そして、学習者から挙げられたあいづちの効果について触れながら、あいづちがあると話し手が安心して話すことができ、会話の雰囲気が良くなることを確認した。また、あいづちのタイミングについては、文末および節末で使うことを説明した。機能やタイミングの説明の後には、教師による短い会話例を見せ、学習者がより理解しやすいようにした。

次に、ビデオⅠの会話を簡略化したスクリプトを用いた練習を行った。まずは、あいづちのタイミングをつかむために、教師が話し手の発話を読むのに合わせて学習者全員で聞き手の発話を読んだ。次に学習者同士のペアを作り、交互にスクリプトを読む練習を行った。ペア練習後、学習者が前に出て、スクリプトを読みながら話し手役の教師を相手に聞き手役をするという発表をした。運用練習としては、教師の実際の話を聞きながらあいづちを使ってみるという活動を行った。これも発表形式で行ったが、始めの2回は話の内容を韓国語で簡単に説明した後にどのようなあいづちを使えるかヒントを与え、3回目以降は説明をせずに行った。このように徐々にハードルを上げていくことで、スムーズに運用練習を行えるようにした。時間と人数の関係で全員に発表させることはできなかったが、クラスメイトの発表を見て評価をしながら学ぶことができたと思われる。

6. 授業評価

授業後のアンケートの結果では、「今日の授業はよく理解できた」という質問に対して100%の学習者が評価「5」を、「今日の授業は役に立った」という質問に対しては94%が「5」、6%が「4」を選択した。自由記述でも「普段接することのない授業方式で、新しい内容を習えたのでよかったです」「自然に習ったのでよりよく理解もできてとてもおもしろかったです」「今日見た映像でその（あいづちの）重要性がさらに理解できるようになりました」といった感想が挙げられており、今回の授業実践が学習者にとって新たな学びとなったことが示された。

7. ジョイントゼミ

授業後のジョイントゼミでは様々な意見やコメントが得られたが、ここでは3点について述べる。まず、あいづちに付随する姿勢やうなずきなどの非言語行動についての指導を行わなかったため、運用練習の際に動きの不自然な学習者がいたという指摘を受けた。映像を用いれば非言語行動を取り入れることも十分可能であり、今後検討するべき項目である。同じく運用練習の際、学習者の誤用に対してのフィードバックが不十分であったとの指摘もあった。この点に関しては、授業前に誤用を予測し対応できるように準備をするべきであり、反省事項となった。また、女性の友人同士のあいづち表現のみ扱っていたが、他の待遇におけるあいづちについてはどのように指導を行うのかという質問も受けた。これについては、様々な場面を設定し映像教材を充実させていく必要があると考える。

8. 実習生の感想

今回の実習では、事前準備の段階での実習生同士の話し合いがとても重要だということを実感した。授業で何を実践したいのかという軸をしっかりと共有することで、その後の活動をスムーズに進めることができた。

実際の授業では、学習者のレベルが考えていたよりも高いことに驚いた。大学で1年間日本語を勉強したという学習者がほとんどだったが、理解力も発話能力も高い学習者が多く、韓国の大学教育のレベルの高さを感じた。

また、授業後のジョイントゼミは大変貴重な機会となった。教師にとって自分自身の授業を協働で振り返り、内省を促す機会は多くない。今回のゼミで得られた反省を今後の授業デザインに生かしていきたい。

実習教案

【授業の目的】

・JFL 環境では意識が向けられにくい聞き手側の発話に注目させ、コミュニケーションを円滑に進めるための「あいづち表現」の機能と使い方について理解させる。

【授業の目標】

・映像を通してあいづちの存在に気づき、あいづちの有無によって会話にどのような違いがあるのかを考える。
・グループワークの中であいづちの機能について考える。
・スクリプトを使った練習や教師を相手にした口頭練習を通して、あいづちを使うタイミングを体得する。

【学習項目】

・友人同士の会話で使われるあいづち表現
・あいづちの種類　①聞いているという信号（うん、んー、など）
　②理解しているという信号（あー、そうなんだ、など）
　③感情の表出（えー、へー／いいねー、すごい、など）
・あいづちのタイミング（話し手の「～けど、～て、～で、～から、～し」などの後）

時間 (75 分)	流れ	内容	備考
5	自己紹介 授業内容の説明	教師４名の簡単な自己紹介 どのような活動をするか簡単に説明する	・各自名札を用意する ・開始前に人数を見て、グループ分けを考える
10	ビデオの内容確認 ビデオの比較 （メモ）	１）ビデオの内容把握のためにⅠを一度見せた後、理解を確かめる質問をする ２）Ⅰ・Ⅱのビデオを見比べて、Ⅰの方が楽しそうだということを確認する ３）B の言葉をメモをするように指示し、Ⅰ・Ⅱを見せる	・ビデオⅠ（あいづちアリ） ビデオⅡ（あいづちナシ） 各１分程度 ・友人同士の普通体発話の会話 （A が体験談を話し、B が聞き手となっている）
10	グループワーク （ワークシート）	１）メモをもとに、グループごとに話し合う （1 グループ 5 人程度） [1]　1 番目と 2 番目のビデオはどんな印象でしたか。 [2]　1 番目のビデオで、B さんは話を聞きながらどんな言葉を使っていましたか。 [3]　[2]の言葉は会話の中でどのような効果あると思いますか。	・グループに名前をつける ・グループに 1 枚ワークシートを配る ・日本語での話し合いが難しい場合は韓国語の使用も認める ・話し合いを録音する
5～10	発表	各グループで話し合った内容を発表する（日本語で） ※[1]について各グループの意見を聞き、次に[2]…というように進める	・各質問につき 3 グループずつ答えを聞く ・その際、[1][2][3]で黒板を区分けし、[2]についてはあいづち表現の①②③の種類別に板書する
10	教師からの説明	１）まず、[2]について言及しながら「あいづち」という言葉を提示し、あいづちの有無によって印象がどのように異なるかまとめる ２）あいづち表現の種類と機能について、挙がらなかったものを補足しながら説明する ①「うん」→聞いている ②「あー、そうなんだ」→わかった ③「えー、へー／いいねー、すごい、いいなー」→気持ち ３）効果についての意見に触れながら、あいづちの有無によって話し手がどんな気持ちになるかを説明する ４）あいづち表現を使うタイミングを提示する「～けど、～て、～で、～から、などの後」	・友人同士の会話であることをきちんと押さえる ・それぞれのあいづちの機能について、短い実演をする ・タイミングがわかるように、短い実演をする
10	ペアワーク （スクリプト）	１）スクリプトを配り、【教師＝話し手】【学生＝聞き手】を読み、タイミング練習をする。 ２）スクリプトをペアで読んで練習する	・スクリプトはビデオⅠを簡略化したもの ・交互に聞き手役を練習するようにする

15～20	発表 （前に出て教師を相手に行う）	1）スクリプトを読みながら発表＜2 人＞ （教師が聞き手、学生が話し手をする） 2）教師が体験談を話し、学生は聞き手となってあいづちを使って会話をする＜4 人＞ ①使いそうな「気持ちのあいづち」を加える ②1 つ目と 2 つ目の話＜小松Ⅰ、福冨Ⅰ＞ （韓国語で要約して、どんなあいづちを使うか確認する） ③3 つ目と 4 つ目の話＜小松Ⅱ、福冨Ⅱ＞ （韓国語＆説明なし）	・発表は希望する学生にさせるが、いなければ指名する ・小松、福冨がそれぞれ 2 つずつ話を用意する ・発表後にコメントを言う
5	振り返りシート	1）授業のまとめを簡単に行う 2）振り返りシートに記入する	・振り返りシートには、あいづち表現についての理解の確認、今回の授業の感想などを記入する ※韓国語訳　回答も韓国語 OK

実習教材

【教材１　メモ】

MEMO

1番目のビデオと 2番目のビデオを見ながら、B さんの話した言葉を書いてください。
（わかるところだけでいいです。）

첫번째 비디오와 두번째 비디오를 보면서 B가 하는 말을 써주세요.
（알아들을 수 있는 말만 쓰면 돼요.）

1 番目	2 番目

【教材２　ワークシート】

★リーダー（리더）　　★書記（메모）　　★発表者（발표자）

さん	さん	さん

＊グループで話してみましょう。（그룹별로 말해봅시다.）

［質問1］ 2 つのビデオを見た印象はどうですか。
（두 비데오를 보고 어떤 인상이였나요?）

1番目（첫번째）　　2番目（두번째）

［質問2］　1番目のビデオで、B さんは話を聞きながらどんな言葉を使っていましたか。
（첫번째 비데오에서 B 의 회화를 듣고 B 는 어떤 표현을 사용하였나요?）

［質問3］　［質問2］の言葉は、会話の中でどのような効果があると思いますか。
（질분 2 의 표현은 회화중 어떤 역할/효과을 하고있어요?）

【教材３　「A さんと B さんの会話」】

A さんと B さんの会話

A：冬休みに旅行に行ったんだ。	B：えー、いいねー。どこに行ったの?
A：京都。	B：あー、そうなんだ。
A：うん。それで、コップのお店があってね、	B：うん。
A：そこでコップを作ったんだ。	B：へー、いいねー。簡単に作れるの?
A：うん。白いコップが最初からあって、	B：うん。
A：そこに絵を描くだけだから。	B：あ、そうなんだ。いくらくらいかかるの?
A：1 つ 1000 円から 1500 円くらいかな。	B：へー、いいね。安いね。
A：実は、このコップなんだー。	B：えー、すごーい。かわいいねー。
A：でしょー。	

「あいづち」
①「聞いている」　：　うん
②「わかった」　　：　あー、そうなんだ
③「気持ち」　　：　えー、へー、いいねー、すごい、かわいいねー、安いね
★「～けど、～て、～で」などの後に、あいづちを使う。

【教材４　振り返りシート】

アンケート

1. 普段どこで日本語を使いますか。（あてはまるものをすべてに○をつけてください。）
평상시 어디서 일본어를 사용하세요?　（합당한 곳에 ○를 쳐주세요.）

①大学の授業　대학교 수업　　②学院の授業　학원의 수업
③日本人の友人や知り合い　일본친구나 아는 분　　④仕事やアルバイト　직장이나 알바
⑤インターネット・テレビなど　인터넷이나 텔레비죤

2. あいづちについて勉強したことがありますか。（あてはまるほうに○をつけてください。）
맞장구에 대해 배운적이 있나요?　（합당한 곳에○를 쳐주세요）

①はい　네　　②いいえ　아니요

3. 今日の授業であいづちについてよく理解できましたか。（あてはまる数字を１つ選んで○をつけてください。）
오늘 배운 맞장구에 대해 잘 이해가 됬나요? （합당한 곳에○를 쳐주세요）

よく理解できなかった		どちらでもない		よく理解できた
잘 이해가 안됬다		어느쪽도 아니다		잘 이해가 됬다
1	2	3	4	5

4. 今日の授業は難しかったですか。（あてはまる数字を１つ選んで○をつけてください。）
오늘 수업은 어려웠나요? （합당한 수자를 하나 골라서 ○를 쳐주세요）

易しかった		どちらでもない		難しかった
쉬웠다		어느쪽도 아니다		어려웠다
1	2	3	4	5

5. 今日の授業は役に立ちましたか。（あてはまる数字を１つ選んで○をつけてください。）
오늘 수업은 도움이 됬나요? （합당한 수자를 하나 골라서 ○를 쳐주세요）

役に立たなかった		どちらでもない		役に立った
도움이 안됬다		어느쪽도 아니다		도움이 됬다
1	2	3	4	5

6. 今日の授業に対するご意見やご感想があれば、以下にご記入ください。
오늘 수업에 대한 의견이나 생각이 있으면 써주시길 바랍니다.

教壇実習感想

呉暁婧
（お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較社会学専攻　日本語教育コース）

今回の教壇実習は私にとって貴重な経験だった。本番の授業は 75 分しかなかったが、事前準備や実践論文投稿など、実習生同士のみんなで十分の力を入れた。

まず、事前準備の段階での実習生同士の話し合いがとても重要だということを実感した。実習前の 4 か月ぐらいのころから、週に一回の程度で話し合いを行った。授業で何をやりたいのかをまずみんなで共有した。JFL 環境では意識が向けられにくい聞き手側の発話、特にあいづちの指導を目的とし、学習者自身の気づきを重視する実践を決めた。それから、実習生同士の意見や考えを交換しながら、具体的な教案を作り始めた。授業の流れをビデオ視聴、グループワークに続き、教師からの説明を行い、最後に練習・発表を行うというものとして決めた。実習生同士のみんなで一緒にビデオの内容を細かに考えたり、教師のセリフを作ったり、運用練習の難易度を調整したりし、活動をスムーズに進めることができた。

実際の授業では、事前に思いがけないことがいろいろあった。ビデオがうまく映らなかったことであわててまごまごしてしまった。学習者のレベルが考えていたよりも高いことに驚いた。学習者の授業中の様子は思ったより静かであった。教師として求められる臨機応変の能力が重要なことだと実感した。教壇に立つのは容易ではないことだと体得した。

また、授業後のジョイントゼミは大変貴重な機会と思う。いままでは教師にとって自分自身の授業を協働で振り返り、内省を促す機会は多くない。自分たちがデザインした授業はとても良かったと思ったが、ジョイントゼミを通して、他の教師から多様なコメントや意見などをいただいた。今回のゼミで得られた反省を今後の授業デザインに生かしていきたい。

教壇実習だけではなく、野外実習も面白かった。同徳女子大学の博物館を見学し、朝鮮時代の女性について学習した。韓国の故宮景福宮と国立民族博物館を訪ね、韓国の歴史や伝統精神をより深く理解した。伝統文化の街、仁寺洞、明洞など、それぞれが関心のある韓国の文化を訪れ学んでいた。野外実習を通して、私は韓国が大好きになった。

今の段階では、実習生同士で実践論文投稿を準備している。みんなの力で良い学会発表の成果を期待している。

黄明淑
（お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較文化学専攻　日本語教育コース）

今年の教育実習は韓国の同徳女子大学で行われた。私にとって、韓国人学習者に日本語を教えるのは今回が初めてだった。授業時間は 75 分間で、学習者数は 18 名、日本語のレベルは初級後半から中級前半であった。学習項目は、友人同士の会話におけるあいづちの種類、あいづちの機能、あいづちのタイミングの 3 点であった。

計画の段階で、今回の実習をより意義のあるものにさせたく、私たち 4 人はいろいろ話し合いをした。その中で、JFL 環境では非常に習得がしにくいあいづちについて取り上げることにした。あいづちという言語項目は、教えるのが非常に難しい項目である。また、1 回限りの限られた時間に習得させるのは難しいと考え、まず、映像を通してあいづちの存在に気づき、あいづちの有無によって会話にどのような違いがあるのかを考えさせた後、グループワークという協働学習を通してみんなであいづちの機能について考えてもらった。その後、スクリプトや練習や教師を相手とした口頭練習を通して、あいづちを使うタイミングを体得することを授業の目標を設定した。

授業開始10分にもならないうちに想像もしなかった学生からの「あいづち」という一言で驚いたし、自信が湧いてきた。日本で中国人学習者を対象に模擬実習をしたときもあいづちが出てきていなかったのと、授業の後でも何人かの学生に「あいづちとは中国語で何ですか」と聞かれたときは正直ショックだった。でも、今回の実習ではまだ教授もしてないのに、学生自らあいづちに気がつき、答えてくれたのはとても大きな力になった。

75 分間授業は楽しくて、学習密度の高い雰囲気で行われたが、学生たちが一生懸命積極的に協力してくれ、授業後の振り返りシートからもいい評価をもらい、学生に役に立てる授業ができて、やりがいを感じた。

午後のジョイントゼミではいろいろな指摘とコメントをいただき、やったことに対してプロの先生と先輩からフィードバックをもらえたのが何より嬉しかったし、言葉では言い表せない達成感があった。また、これらの指摘とコメントから、問題意識を感じ、これからも教育の現場で生かすための研究課題とした。

この教育実習に至るまで 4 人のメンバーでいろいろと話し合ったり、調べたりする段階を越えたが、中国に「団結は力だ」という有名なことわざがあるように、正にそれだった。みんなで一緒に工夫し、相談し、話し合い、段々ゴールへ近づいてきた。ビデオを使って視覚効果を高めることで、リアル感をアップし、授業効果を高めることがで

きた。時代の発展とともに、パソコンのハイテクノロジーとともに生き生きとした授業ができることには感謝と驚きを覚えた。充実した一日だった。

短い六日間であったが、韓国にいる間ずっと充実していたし、とても意味のある時間を過ごすことができた。また、人生初の意義のある実習ができて達成感を感じている。こういう意味で今回の試みはとても大きな財産になると思う。このような貴重な場を提供してくださった大学側と先生方に心より深く感謝したい。

小松奈々
（お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較社会学専攻　日本語教育コース）

私は今まで教育実習と言えば、初級用、上級用とレベルが決まった学生に指定の教科書の一部を教えるようないわゆる従来型の教育実習の経験しかありませんでした。今回韓国で教壇実習が行われることになり、今までの実習とは違う形のものであることに初めは戸惑いを覚えました。しかし、先生方やゼミの仲間たちと何度も話し合い、今回の実習の形に行き着きました。

今回は日本語学校や大学の正規授業のようにカリキュラムが組まれた中に入り込むのではなく、1回きりの体験授業の形をとっています。そこで私たちのゼミでは、JFL 環境における学生たちに必要な情報は何か、多少のレベル差に関わらず理解できる内容は何かを相談した結果、「聞き手の言語行動」に焦点を絞り指導することにしました。

実際の授業では私たちが想像していたよりもはるかに学生たちの実力が高く、スムーズに授業を進めることができ、韓国での日本語教育のレベルの高さ、学生たちの真剣さを実感した授業となりました。授業自体には反省点も多々ありますが、「聞き手の言語行動に気づく」という大きな目標は達成できたのではないかと思います。

その後行われた、同徳女子大学校の先生方、院生の方々とのジョイントゼミでは、様々な意見交換を行うことができました。私達の授業についても多方面からのアドバイスをいただき、今後の実践に生かすためのヒントを得ることができました。また、今回の実習では様々な研究の視点から多様な授業モデルを提示することも特徴の一つであったと思います。ジョイントゼミでは、異なる専門を持つ学生たちが、お互いの意見を活発に交換することができ多くの刺激を受けることができました。

今回のような授業実践とゼミ方式の実習は、研究発表の形をとったゼミとは違い「研究者であり、一教師として現場にどのような還元ができるか」という目的がはっきりしており、そこに向けて活発な意見交換ができたため、非常に意義のある機会だったと思います。また、海外での日本語教育事情を直に体験することができ、日本国外で日本語を教えることの意味について考えさせられる機会となりました。学習者はなぜ日本語を学ぶのか、私達教師はなぜ日本語や日本に関する知識を教えるのか、それは学習者が学ぶ場所が日本国内か海外かによって変わるはずです。今回、同徳女子大学校の先生方からのお話を伺い、自分にその捉え直しが必要であることを実感しました。

最後に、実習参加者が授業を成功させるまで道筋をつけてくださった森山新先生、佐々木泰子先生、私達を温かく迎えてくださった同徳女子大学校の李徳奉先生と院生の方々、この実習を楽しく忘れ難い思い出にしてくれた参加者の皆さんに感謝したいと思います。ありがとうございました。

福冨理恵
（お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較文化学専攻　日本語教育コース）

今回の教壇実習では、文法項目ではなく言語行動を指導するという新しい試みに挑戦しました。具体的には聞き手の言語行動の一つであるあいづちを扱いましたが、グループのメンバーの中であいづちの指導を行ったことがある人が誰もいなかったため、どのような授業にすればよいか頭を悩ませ、話し合いに多くの時間を費やしました。そして、あいづちという学習項目は学生にとっても初めて学ぶものであり、あいづち自体を意識したことがあまりないであろうということから、教師が一方的にあいづちの種類や機能を提示していく授業方法では十分な学習効果が得られにくいと考えました。そこで、まず学習者自身にあいづちの存在に気づかせ、あいづちにどのような機能があるのかを考えさせる時間を十分に与えようということになりました。この方針が決まってから、授業の流れを作るのに参考になるような文献を探し、教材の準備に取り掛かりしました。

この準備段階に入るまでの話し合いの期間が、教壇実習が終わるまでの活動に大きな意味を持っていたと思います。というのも、この期間にグループのメンバー全員が今回の授業の意味や目標をしっかり理解し共有したことで、その後の活動がスムーズに運び、分担作業をする際にも軸からずれることなく進めることができたからです。協働で作業を行うときには、その前提として話し合いをしっかり深めて考えを共有することが重要であるということを実感しました。また、メンバー全員で意見を出し合うことにより、より多くの視点が取り入れられ、内容が充実したものになるということもわかりました。もちろん、意見がまとまらず話し合いが思うように進まないこともありましたが、そのような過程を経てこそしっかりとした基盤が作れるのだと思います。

実際に授業を行った際には、学生からの反応も

良く、準備したことはすべてやりきることができたと感じました。あいづちの存在やその機能に気づかせるためのビデオ視聴や、気づいたことについて話し合ってまとめるグループワークを通して、学生たちも自分の感じたことを他者と共有しながらあいづちに対する理解を深めていたようでした。授業後のジョイントゼミでは、授業の内容から進め方まで様々なことについて意見をもらうことができました。私たちに欠けていた視点を取り入れることができ、大変有意義な時間となりました。特に課題として残った点は、あいづちに付随するうなずきや姿勢などの非言語行動を扱っていなかったということ、学生から誤用が出たときの対応に問題があったということでした。非言語行動については、授業時間が短いため学習項目をできるだけ絞ろうとしたことが逆に不自然さを残してしまう結果になったと考えられます。あいづちと非言語行動を切り離して教えるということはどういうことなのか、もっと考えなければいけなかったと反省しました。また誤用に関しては、授業自体があいづちへの気づきや理解に焦点を当てていたのに、授業の終わりに実際の運用まで持っていったことに原因の一端があると考えられます。これらの反省を生かし授業デザインの改善を図れるように、今後教壇実習の振り返りを行っていきたいと思います。

参考文献

熊崎早苗・田畑理咲（2008）「口頭ナラティブ指導におけるディクトロクス応用の試み」

中井陽子・大場美和子・土井眞美（2004）「談話レベルでの会話教育における指導項目の提案:談話・会話分析的アプローチの観点から見た談話技能の項目」『世界の日本語教育』75-91,255,262-263

堀口純子（1997）『日本語教育と会話分析』くろしお出版

宮崎幸江（2003）「聞き手の行動をどう教えるか―サマーコース中級クラスでの指導例―」『ICU日本語教育研究センター紀要』12,45-62

ご　ぎょうせい、こう　めいしゅく、こまつ　なな、ふくとみ　りえ
／お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較社会文化学専攻